

総合科学の基礎C
哲学思想の基礎

2018/04/27
そもそも「哲学」とは③

前回の要点

- 「平等」と一言で言っても、哲学的には、「結果の平等・機会の平等・可能性の平等」などさまざまな概念がある。
 - 平等と自由とは矛盾するので、どうバランスを取るか哲学・社会的に重要な論点になる。
- プラトン・アリストテレス・キリスト教が西洋思想の三本柱。
- 「正しい」には、TrueとRightがある。
 - いずれにせよ、正しさは普遍を目指す。

今日の予定

- 前回の残り:「認識」という概念。
- 新たな概念として、OntologyとEpistemologyなどを取りあげる。
- 前回分の小テスト
- 前回のコメントで、「正しさ」と「価値観」を混同している人が多かったので、整理する。
- 次回の授業: 来週水曜(5月2日)
 - 新しい授業ファイルを準備している時間的余裕がないので、今回のファイルが二回分。

「認識」

- 哲学用語の「認識」は英語でKnowledge:「正しい知識Truth」ということ。
 - 日常語で「認識」は、「個人の解釈・信念Belief」というニュアンスで使われることも多い。
 - 「認識」を和英辞典で引いてみると、
 - Knowのほかにも、Cognition, Recognition, Understand, Realizeなどが列挙されている。
- 「正しさが普遍的だとすると、みんなが同じことを正しいと認識するはずだ」
 - 「真理を知る」という意味ならその通りだが、「個人的な解釈」という意味なら、

KnowledgeとBelief

- 日本語の「認識」: KnowledgeとBeliefの両方の意味で使うようだ。
- 哲学では、両者は反対概念。
 - 正しい知識: Episteme
 - (社会全体の) 思い込み、俗説: doxa
 - プラトン哲学のポイントの一つ: 「ドクサ(Common belief or popular opinion)を脱して正しい知識へ」
 -

どうして「人それぞれ」がこんなにも蔓延しているのか?

- おそらく、戦前の「価値観の押しつけ」「権力による強制」への反省。
- しかし、「人それぞれ」などと言っていると、強い者が勝つ。
- 戦前的な「押しつけ」「強制」への対抗としては、「人それぞれ」教育は失策。
 - 『コピペと言われないレポートの書き方』あとがきを参照。

今日の展開: 存在論から認識論へ

- アリストテレスのMetaphysika→Ontologia
- デカルトによる転換: OntologyからEpistemologyへ。
 - EpistemeのLogos: 19世紀になって作られた言葉。
- カント: 「物自体Ding an sichは認識できない」
 - ただしカントは、認識枠組みは「人類普遍」と考えた。
- 20世紀、相対主義Relativismの流行
 - サピア・ウォーフの仮説
 - ソシュール言語学

学生のコメントです

- 「自然科学的に見て神は存在しない」。
 - これは学生のコメントであり、
 - 自然科学はキリスト教における神の創造説を前提として成立した。
 - 「自然を創造した者」「自然の第一原因」については
 - 新しい話を聞いても、自分の「ドクサ」に取り込んでしまう人が多い。自分の常識を否定するような事実や主張について理解するようにしましょう。
 - それが

正しさと価値観

- 「人それぞれに正しさは異なる。人それぞれに価値観が異なるからだ」。
 -
 - 個人の価値観は、ほとんどの場合、「社会的に価値を認められたもの」の中からどれを選ぶかという「」の問題。
 - 「社会的な価値観の違い」と言われるようなものも、おおむね同様。

たとえば、

- 「国が違っても価値観は同じと言っていたが、例えば日本では周りに合わせるのがよいことで、アメリカでは自分のことは自分で決めるのがよいことである、など、やはり価値観の違いはあるのではないか」。
 - 日本でもアメリカでも、「周りの人たちの判断や感情を尊重すること」と「自分の意志は自分で決めること」の()
を持っており、()
という点にあるだけではないですか？

まれに、

- 社会的に全く価値を認められていないようなものを愛好する人もいます。
 -
 - = 「間違った価値観」がある。
- そもそも、個人が「正しいと 」ことと、「正しい」ことは別です。
 - 個人が「正しいと思う」からといって、その思いが間違っている可能性は大いにあります。
 - 個人の価値観や思いは、社会的・哲学的に正しいかどうかを判定されるべき対象であって、

社会的規範と「正しさ」

- 「犯罪が多発している社会では、『道徳的な正しさは社会的規範』ということがなりたたないのではないか」。
 - 「犯罪が()」からといって、「犯罪が()」ことにはならない。
 -
 - ヒュームの「自然主義的誤謬」批判。

もちろん、

- 通常は、個人の価値観や思いの「正しさ」を判定するのは、社会的規範。
 - 社会的に禁止されているものを愛好すると処罰される。
 - 犯罪が多発する社会にも犯罪を禁止する法がある。
- しかし、社会全体が過つ場合がある。
 - たとえば、「個人は国のために命を捨てよ」という法律が定められることはありうる(徴兵制)。そして多くの人がそれを「正しいこと」と信じるということもありうる。

(プラトンのドクサ批判)

ではどうやって?

- 「社会的な規範の正しさは、どのようにして決まるのか。多数決で決まるのか」。
 -
 - 哲学・倫理学は、人間本性や論理、慣習、法などを根拠として、「正しさ(なすべきこと)」を考察し、説得と合意形成を図る。
 - これら根拠の一つ一つが水戸黄門の印籠のような「決定版」「最終根拠」ということはない。知識は体系として力を持つ。
 - 「人間が正しいと思っていること」の中から、「本当に正しいこと」を探そうとする営み。
 - ・ 詳しくは山口裕之『人をつなぐ対話の技術』を参照。

ここまでのまとめ

- 個人の価値観
 - 「好み」であって、「正しさ」ではない。
 - おおむね「人それぞれ」でない。ほとんどの人は、「社会的に許容された好ましいもの」の中から選択する。
 - 「ほとんどの人が価値を認めないもの」を愛好する人もいるが、許容される。
 - 「社会的に許容されないもの」を愛好する人は処罰される。
- 社会的規範
 - 通常は「正しさ」の根拠として通用する。
 - 社会的規範自体が誤る場合もある
 - 哲学・倫理学は、規範そのものを論理と事実によって批判的に検討する。

宗教戦争の原因

- 「歴史の中で人は、自分たちの信仰の中の規範にそぐわないものを異端などとし、排除してきた。根底にある倫理的な意味は同じでも、僅かな差異が原因で争ってしまう」。
 -
 - 闘争に際して、教義が連帯のきずなとして利用され、宣伝されたために、それを信じ込んだ人たちが、教義の違いを闘争の真の理由だと信じ込むようになった、というのが歴史的な実態でしょう。

価値観を異にする人と

- 「テロなど起こす人たちがいるので、価値観を内面化するやり方を国際的に統一すべきだ」。
 - そういう人たちはもう大人だから、今から価値観をすり込もうとしても難しいでしょう。

今日の宿題

- 次回授業が5月2日(水)で、コメントを見ている時間がないので、今回は授業コメントはお休み。
- そのかわり、今回分の小テストをmanabaでやってください。
 - やり方は、コメント提出と同じ。「小テスト」のところにおいておきます。
 - 締め切りは5月1日(火)17時。
- 次回も、配布資料を自分で印刷するのを忘れないように。